

自然と共生した複合開発を目指して開発が進められている苫東地域。その苫東は勇払原野の原型を色濃く残し、地域の宝と目されています。この苫東の現況緑地を対象に新しい「環境コモンズ」の概念を提起し、その今日的な意味と展開の方向を考えるフォーラムが9月19日(土)苫小牧サンガーデンで開かれました。利活用を担うNPO苫東環境コモンズ(法人格取得申請中)の設立に先立つもので、設立準備事務局と、(財)北海道開発協会に設置された環境コモンズ研究会(座長:小磯修二)の主催により開かれました。



基調報告

環境コモンズによる苫東の再生

苫東環境コモンズとは何か。結論から言えば、苫東の豊かな自然を「守りながら利用させてもらう」仕組みづくりであり、土地の重層的な利用によって持続可能な環境を保全するというものだ。

苫東の空間、特に現況緑地について、NPOを主体に「苫東環境コモンズ」という形で保全しながら利用を進めていくという動きが進みつつある。その



小磯 修二 氏
(財)北海道開発協会環境コモンズ研究会座長・釧路公立大学長

取り組みに対してどういう方向を目指していけばいいのか。また、わが国の経済社会情勢をめぐる中で、どのような課題を乗り越えながら、どのような取り組みをしていけばいいのか。北海道開発協会の調査研究事業の一環として設けられた環境コモンズ研究会はこの役割を担って2008年度にスタートした。

「コモンズ」は、日本語では「共有地」という言葉で置き換えられることが多い。経済学で「コモンズの悲劇」という言葉があるが、その対象はイギリスの放牧地である。放牧地はみんなで作る。みんなが使える土地というのはどういう使われ方をするか。それぞれがほかの人に迷惑をかけないように秩序よく使われる場合もあるが、みんなが「私一人ぐらいは多めにそこを使ってもいいだろう」という思いで使うと、共有地としてのコモンズの利用は破綻して悲劇的な結果になる、というのが、「コモンズの悲劇」と言われるもの。

現代になって、その言葉が再び使われている背景には、環境問題や外部不経済でコモンズの悲劇に相当する動きが多く出てきているということがある。例えば、生活排水・工場廃水によって、水質の汚染問題が出てきた。「私の家庭でちょっとぐらい汚水を流しても、そんなに影響はないだろう」という考えをみんなが持つと、それは大きな問題になる。結果的に社会全体の大きな負担となって、多額の税金をかけて解決していかなければならない。コモンズという言葉が使われている要因には、そういう時代背景がある。

われわれがこの研究会で、苫東の現況緑地空間を活用していく場合のコモンズというのは、少し意味合いが違う。コモンズという概念は社会的に有用な意味合いもある。例えば、アメリカのボストンでは、都心に広々とした素晴らしい緑地公園があるが、それをボストンの人たちは「コモンズ」と呼んでいる。そのコ

モンズとは、公園なのだが、みんながそれぞれ自分のベンチを持ち寄ったり、それをほかの人にも使ってもらうなど、一つの空間に対してさまざまな人がいろいろなかわりを持つことで価値を高め、さらに都市の魅力を高めているという意味合いが、コモンズという言葉の中にあるように思う。

なぜ今、コモンズという言葉があらためて語られるようになってきたのか。一つは、「地球は限りある資源」という意識が背景にあるのではないか。オイルショックを1970年代の前半に経験し、それから、今は地球温暖化の問題がある。いずれも、地球資源は限りあるものだということを見せつけられた。ただ、それを意識するのは難しいことで、大きな問題が出てくることによってあらためて、地球が人類共通のコモンズ、資源であることを認識させられるわけだ。これが私は原点ではないかと思う。

そうなってくると、地球というものを排他的に、独占的に、縦割的に使っていくという無駄をいかになくしていくのか。そこで共生とか連携とか協働という言葉が出ているのではないか。この流れを時間軸の中で見ていくのが、「持続可能性」という、最近非常によく使われている言葉。限りある環境資源を子供や孫の世代にもしっかりとつないでいながら、それに見合った開発をしていこうということだ。それを空間軸に当てはめたものがコモンズではないかと思う。それをいかに支えて、活動していくか。その関係軸として、NPOの活動の範囲が広まってきた。あるいは、ソーシャル・キャピタルという側面から見ても、民間、私的な行為の中で公的な活動、営みにかかわっていく広がりがある。これは、コモンズを考えていく視点の一つとしてあるのではないかと思う。

それから二つ目。コモンズというものを考える上で、土地の問題がある。土地の利用制度をより機動的に、“公”と“私”の在り方というものをとらまえながら、土地の持つ価値をいかに高めていくか、そのシステム・仕組みをいかに知恵を出して地域内の機動的な連携によって構築していくかということである。これが、コモンズを考えていく上でのもう一つの大事な視点では

ないかと思う。

私は、今日のフォーラムにおける新しいNPOの立ち上げに、これから皆さんと一緒に考えていく一つの流れ、それから考え方の基本的なところをお話した。新しい時代において新しい皆さんの知恵と工夫で、1万haを超える苫東という空間、その価値を高めていくことができるということだ。新しい発想と新しい仕組み、地域連携の中でその価値を高めていける可能性があるように思う。このフォーラムを契機に、新しいNPO法人「苫東環境コモンズ」の活動がこれから展開されていく可能性というものをあらためて皆さんにお伝えしたい。

基調講演

勇払原野を楽しむ方法

今日は、「勇払原野を楽しむ方法」というテーマにしたが、まず、「原野」という言葉を考えてみたい。原野という呼び方は、ほとんど北海道特有だといっていいのではないか。例えばこの勇払原野もそうだし、根釧原野というのもいまだに使われている。ラムサール登録湿地のときにも、サロベツ湿原という名前ではなくて、「サロベツ原野」という名前で登録されている。これなども典型的なものではないかと思う。

では、原野というのではどういうものをイメージするだろうか。「あまり木の多くない原っぱ」というのが、一般的な理解ではないだろうか。北海道では昔、原野というのは随分たくさんあった。例えば、石狩原野、美唄原野、幌向原野、対雁原野^{ついでかり}というように、原野と呼ばれている方がむしろ多かったのではないかと思うぐらい、あちこちに原野と呼ばれているところがいっぱいあった。共通して言えるのは、比較的樹林が少なく、火山灰地とか湿原が混在していて、生物的にはなかなか面白いところだと考えていい。

外国人で、日本を単独旅行した最初の人だろうと考



辻井 達一 氏
勲北海道環境財団理事
長・元北海道大学教授

えられるイギリス人のイザベラ・バードという女性が、47歳のときに勇払原野を通っている。彼女は東京から東北地方を通して函館へ渡り、函館から苫小牧を通して平取まで到達した人。その人が、自分の妹に送る手紙の形で日記を書いている。今から150年前にその中の一節に書かれた描写と今の風景は基本的には全く違いがなく、また、130年前にブラキストンが美々川沿いに千歳まで行く描写も、現在の風景とそれほど違いはないと考えていいのではないかと。勇払原野にそういう風景が残されているというのは、私たちは喜ぶべきではないだろうかと思う。

これから私たちは勇払原野というものをどう考えたらいいいのだろうか。あるいは、もっと楽しむためにどんなことを考えるべきだろうか、ということをお願いしてみたい。

ちょっと千歳の方に行くと、最近できた「イコロの森」という、かなり自然に近い条件を生かしたところがある。それから、「ノーザンホースパーク」というのがある。美々川は、今でこそ水量が少々足りないが、もう一息でカヌーが上流まで行けるようになるだろうと考えている。それから、海の方へ行くと、最近サーフィンがこの海岸でも盛んになっている。てんでんばらばらにホースライディング、ホーストレッキングができる場があって、それからイコロの森というイギリス風の庭園が存在して、美々川があって、それで苫東のコモンズがあって、それらを全部フットパスでつないでもいいのではないかと。

今日はカヌーに乗るかも知れないけれども、次の週は乗馬で楽しむ、次の週はサーフィンをやってもいいかも知れない。次のときはイングリッシュガーデンでお茶を楽しむことがあってもいい。そういったものの組み合わせを、あるいはネットワークを考えると、この苫東、あるいは苫東コモンズは、もっと楽しいものになるのではないかと。勇払原野という、ここ130年方、風景的にも、あるいは植物の構成的にもそれほど変わっていなかったもの、いわば資源のようなものをもっと生かすためにも、コモンズという思想が非常に重要なのではないかと。

パネルディスカッション

小磯 では、草苺さんからNPO苫東環境コモンズのこれまでの経過、今後の予定、その取り組みについて、具体的にお話しただいてから、研究会メンバーである宮本さん、原田さんに、ご自身の活動の経験を添えて、今後の苫東環境コモンズに向けての提言、あるいは今後の方向性についてのコメントをいただければと思う。

草苺 苫東環境コモンズには、いくつもの原型となる活動や動きがあり、その例が森林愛護組合、遠浅自治会、そして育林コンペなどである。これらは従来からコモンズ的に利用されてきたハスカップの原野や雑木林が土台だ。特にこの雑木林の中心である「つた森山林」は個人と苫東会社の双方が100年間にわたり営々と手入れをしてきた典型的な里山で、これらは人が生物多様性を育み風景を創ってきた。NPOはこれらをさらに上手にみんなで利活用していく。すでに何か協力したいという声を聞くが、作業・資金などいろんな支援方策を用意したい。



草苺 健氏
NPO法人苫東環境コモンズ設立準備事務局

宮本 コモンズの考え方には非常に共鳴する。私どもがお手伝いしている苫東の場所は、全国植樹祭跡地である。コモンズのビジョンでは、ここは「山辺夕日の里」と「つた森山林」を背負った場所である。トライアルのプログラムで、幼児、車いすを使った方々も、平らで広いところでアクセスしやすかったということなので、今まであまり経験のない方、あるいは森との関係が薄かった方々も、ここで少し練習をして奥の方の活動に参加できる「森のゲートウェイ」になるのではないかと。



宮本 英樹氏
NPO法人ねおす専務理事

それからもう一つ、「森のコミュニティーセンター」というようなコンセプトがある。今までつながってなかったコミュニティーを森の中でうまくつなげることで、

このコモンズに入ってこられるような創造的な人々を増やしていけるのではないかと。そういったことで、私たちも苦東環境コモンズの活動に貢献できないかと思う。



原田 輝治 氏
イコロの森 森の学校長

原田 私どもの「イコロの森」は去年オープンしたばかり。森の在り方を炭焼きを中心に置きながら、もう一度循環的な森づくりができないかということで、庭、あるいは苗の生産なども含めて、草苺さんが苦小牧で活動されていることに近い取り組みをイコロの森

で展開している。面積は100haほどの森林だが、その中では自然ガイドをやったり、古い林道が縦横に走っているの、その林道を活用しながら、いわばフットパスとして利用している。これからはホーストレッキングのような取り組みもできないかと思っている。

苦東の環境コモンズの対象にされている地域は、非常に多様性に富んでいる環境。苦小牧周辺全体を考えた場合に、ほかにも取り組みをされている団体がいくつもあると思うが、そういったところが重層的に取り組んでいく中で、きっと非常に面白い地域になる。今後の環境コモンズの取り組みに私どもは非常に期待している。

辻井 釧路から東の方へ行くと、よく、「湿原の野外博物館」と言われる。釧路、厚岸、霧多布と湿原がたくさんあるが、実は全部タイプが違い、博物館の部屋を開けて見ていくように、いろんなタイプの湿原が見られる。勇払原野はもっと細かくて、ちょっと動くと湿原があって、砂丘があって、火山灰地があって、モザイクみたいになっている。すごく面白いところではないか。草苺さんはそういうのを生かしてやろうと考えているのではないかと思う。

草苺 時代が一回りすることによって、私たちの審美眼が養われ、原野や雑木林に対してもとても高い評価ができるようになってきているのだろうと思う。

苦東環境コモンズが発生する大きな背景を小磯先生が最初に言われた。北海道においては開発とか産業とかなりわいとったものが、実は少し低く見られてい

たのではないかという気がする。その産業空間も新しい目で見直され、雑木林を見る視点も徐々に変わり、両者が調和する苦東環境コモンズを旗揚げするのに一番いい時期だったのではないかと思う。たかが原野、たかが雑木林なのだが、やはりそういう背景もあったのではないか。

小磯 苦東の1万haを超える空間を今後、どういう形でこの地域の財産として使っていくのか、われわれの一つの大きなテーマではないかと思う。苦東の用地買収に当たられた方の苦労話をお聞きすることがあった。その中でも、特に「つた森山林」は当時、蔦森春明さんという方が持っておられた土地で、「今持っている“つた森山林”という森の価値を、ぜひ継承する形で工業用地の中で使ってほしい」、それが用地を提供するときの条件になり、世界に冠たるインダストリアルパークと言われる、これだけ緑地のある工業基地開発計画につながっていった。38年たったこの場でなされている議論というのは、まさに蔦森さんの遺志、理念そのものではないかと思う。

今日のフォーラムはあくまでも、この地域における新しいNPOの誕生に向けての場ということで、多くの皆さんがこの取り組みに対して興味と関心を持って参画していただくきっかけになればと思う。その願いを最後に申し上げて、このパネルディスカッションを終了したいと思う。

設立準備事務局挨拶



原口 佳記 氏
NPO法人苦東環境コモンズ設立準備事務局代表

原口 辻井先生が言われたように、100年以上ほとんど変わらない状態が維持されているこの素晴らしい自然環境と景観は、得難いものだと思う。スケジュールとしては、設立が認可されるまで諸準備を行いながら、12月から来年1月以降に具体的な活動に入りたいと思っている。幅広いご支援、あるいは会員としてご参加いただければ、この上ない喜びである。本日は大変ありがとうございました。

(文責：開発調査総合研究所 佐々木)